

# 新編正徹年譜 (上)

稲田利徳

## はじめに

従前の文献調査の成果をもとにして、ここに正徹の詳細な年譜を作成する。新編、新研究などといった表題は、私の好みとするところではないが、あえて「新編」としたのは、すでに公表されている、藤原隆景氏の「正徹年譜」(国語と国文学昭6・7)と混同しないためもある。勿論、そういった形式的な問題だけでなく、「新編」としたことは、内質的にも「新」の意味合いをこめたつもりであるが、それは、次のような諸点においてである。

藤原隆景氏の年譜は、長年、「草根集」を読みこんでこられただけあって、適切な処理、判断がなされているが、今から約四十年前に作成されたものである。その後「永享五年正徹詠草」(天理図書館蔵)「永享九年正徹詠草」(大東急記念文庫蔵)「月草」(陽明文庫蔵)「松下集」(国会図書館蔵)など、正徹に関連する新資料が相次いで発見されたので、年譜も、相当に拡充できる段階にいたっている。

また、藤原氏は、専ら、丹鶴叢書本「草根集」に依拠されていたが、「新編」では、諸本の異文も参照した。これによって、丹鶴本の欠脱本文や誤写などが相当訂正することができる。例えば、丹鶴本では、永享四年に亡父三十回忌を行ったと指示するが、これは諸本の三十三回忌が正しく、父の死は、正徹の二十三歳ではなく、二十歳の時になるなど、その著しい例の一つである。

他方、正徹の自筆本や転写奥書などで年時の判明するものや推定可能なものも追加し、「草根集」の詞書では、官職名のみで掲出されている人物も、できるだけ実名をもって記述するようにし、全体に、網羅的な年譜作成を志向した。

今回は、紙面の都合で、生誕より宝徳二年まで扱い、次号(下)をもって完結する予定である。

## ● 記述方法

- (1) 最初に、年号・西暦・正徹の年令を記す。
- (2) 次に、上段に「月」、下段に「日」を、アラビア数字で記す。
- (3) 説明のあとに、括弧で出所を示す。但し、「草根集」の場合は、巻の数字のみ記す。
- (4) 諸本としては、書陵部十七冊本(略号―書)、内閣文庫十五冊本(内)、島原松平文庫本(島)、尊経閣文庫本(尊)の四部を使用する。
- (5) 諸本間に主要な異同があったり、推定年時過程やその他に問題のあるときは、補注でさらに触れることとする。
- (6) 正徹と特に関連する人物の死没や作品の成立など、参考のため、若干、書き加えたものがある。それは、黒丸を付して他と区別する。

永徳元年(一一八一)、一歳

この年生誕す(草根集・碧山日録・その他諸資料)。備中国

小田郡小田神戸山城主小松康清の二男と伝えられる(小田史料関係)。(注1)

明德元年(一三九〇)前後、十歳前後

七夕星に、木の葉に書きつけた和歌を手向ける。詠歌の初め(正徹物語)。(注2)

明德三年(一三九二)、十二歳

9・9 伏見院の御所で大輪の菊を見て印象を深める(巻十)。(注3)

応永二年(一三九五)前後、十五歳前後

8・ 幕府奉行治部方の月次歌会に出席し為尹・為邦・了俊らとまみえる(正徹物語)。(注4)

応永四年頃(一三九七)、十七歳頃

奈良の門跡(南都興福寺一乗院門跡か)に出仕す(正徹物語)。(注5)

応永五〜六年(一三九八〜九九)十九〜二十歳

奈良尊勝院に奉行にでるか(正徹物語)。(注6)

応永七年(一四〇〇)、二十歳

この年に父死没(巻二)。(注7)、この年ころより海印寺僧正広経と交る(巻三)。詠草の保存整理を開始す(巻二)。(注8)

応永九年(一四〇二)、二十二歳

春 為邦・為尹・了俊らと東山へ花見に行く(正徹物語)。(注9)

応永十年(一四〇三)、二十三歳

1・ ●了俊の「二言抄」の成立。

この前後、了俊らと石山寺に参詣し、御堂の柱に和歌を記す(巻三・永享九年正徹詠草)。(注10)

応永十二年(一四〇五)、二十五歳

12・ 了俊から「西行上人談抄」など、六部の歌書の相伝を受く(京都大学本・高松宮家本「西行上人談抄」奥書)。(注11)

応永十三年(一四〇六)、二十六歳

了俊より「言塵集」を与えられる(「言塵集」諸本前書)。(注12) この年、東国地方に旅行するか(巻二)。(注13)

応永十六年(一四〇九)、二十九歳

12・21 「秋篠月清集」を書写す(吉田幸一氏蔵本奥附)。

応永十七年(一四一〇)、三十歳

称名寺で「拾遺愚草」を書写す(来田氏旧蔵、現名古屋大学蔵本奥書)。

応永二十一年(一四一四)、三十四歳

この年以降、まもなく東福寺に入寺するか。(注14)

4・17

細川道欽家の頓証寺法染一日千首に出詠す(巻一・金刀比羅宮「松山短冊」)。(注15)

12・8

「頓証寺法染百首」と「同当座三十首」に出詠す(続類従本・白峯寺本など)。(注16)

応永二十二年(一四一五)、三十五歳

9・ 細川家被官安富宝密の父追善和歌を詠す(白峯寺蔵「詠法華経和歌」)。(注17)

応永二十三年(一四一六)、三十六歳

6・19 五十首歌を詠じ、為尹・宋雅の僻案点を受ける(巻二)。

応永二十四年(一四一七)、三十七歳

1・25 ●冷泉為尹没(57)。

応永二十五年(一四一八)、三十八歳

3・末 美濃尾張地方の旅に出発す。初日は鏡山に旅泊。翌日、鏡山をたち、小野、醒が井をへて山中に旅泊。さらに関の藤川、野上をへて黒田に旅泊。(類従本「なぐさめ草」)。

4・1〜10 黒田にしばし逗留し、太神宮に参詣、十日程して再び黒田に帰る(なぐさめ草)。

4・24 黒田村の御堂で、都の優婆塞に出会い欲談す（なぐさめ草）。

4・25 田面の中なる所で十日程生活す（なぐさめ草）。

5・7 尾張清州に逗留し、その間「源氏物語」の講義を行う（なぐさめ草）。

7・18 尾張国清州の城中竹陰軒で「なぐさめ草」を記す（松平文庫本「なぐさめ草」）。

応永二十六年（一四一九）、三十九歳

10・ 今川範政家で一夜百首を詠出（巻一）。

応永二十七年（一四二〇）、四十歳

1・17 この日より二十三日まで北野に参籠し「聖廟法染詠百首和歌」を詠ず（巻一）。（注18）

12・1 「秋篠月清集」を某氏に餞別として送る（吉田幸一氏本奥附）。

応永二十八年（一四二二）、四十一歳

1・24 東益之家で詠歌。堯孝・善節も同座（慕風愚吟集）。

9・24 堯孝勧誘の玉津嶋社頭法染百首を詠出（慕風愚吟集）。

11・27 東益之家で太神宮法染百首を詠出（慕風愚吟集）。

応永三十一年（一四二四）、四十四歳

9・5 六角東洞院と高倉の間北頼辻子奥の草庵に住む。正広この時より弟子となる（松下集・正広三百六十番歌合）。

応永三十二年（一四二五）、四十五歳

3・ 伊勢物語「為相自筆本」を書写す（千歳文庫本奥書）。

この頃か、長谷寺に参籠。帰洛後、足利義持の所望で参籠中の詠歌を提出したが、耕雲の批難を受け、反駁す（巻三）。

この頃、定家の「忘れぬや」の歌の解釈をめぐり、耕雲と対抗す（正徹物語）。

8・ 春日西洞院の南頬に転居す。細川道欽より草庵の様子を尋問される（巻二・松下集）。

10・12 ●東師氏没。

10・16 ●細川道欽没（49）。

応永三十四年（一四二七）、四十七歳

2・ 正広・景積・清阿らと長谷寺阿弥陀院に参籠し、十八日には、宝号を冠にして詠歌（巻二・三）。（注19）

正長元年（一四二八）、四十八歳

4・6 「順徳院百首」を、海印寺で書写す（久松潜一氏本奥書）。

10・2 ●飛鳥井雅縁没（71）。

この頃、一条室町上武者小路の草庵に住むか（松下集）。

永享元年（一四二九）、四十九歳

1・1 正月試筆の詠歌（巻二）。

1・2 朝日に匂う山を見て詠歌。春日西洞院の草庵を出て一條室町の旅宿に住む。この頃、世に交らず（巻二）。

月を見て詠歌（巻二）。

1・3 畠山義忠家で詠歌（巻二）。

1・6 北野に参詣し和歌を手向く（巻二）。

1・7 畠山持純家の人丸法染歌を詠ず（巻二）。

1・10 冷泉為之主催の故為尹十三回忌に詠歌（巻二）。

この頃、北野松梅院の女方より梅花と袋を贈られる（巻二）。

為之・持和・義忠・持純など草庵を訪れて詠歌（巻二）。

永明院の花見に行く（巻二）。

2・16 通玄庵の花見に行く。夜、下京に宿る（巻二）。

2・25 通玄庵の桜木のもとに行く（巻二）。

2・26 大原野へ花見に行く。その夜、覚蔵院に宿り、庭前の花を見て詠歌（巻二）。

3・3 大原野から嶺の堂、さらに西芳寺、地藏院辺の花を見る（巻二）。

3・4

3・4 大原野から嶺の堂、さらに西芳寺、地藏院辺の花を見る（巻二）。

- 3・7 畠山義忠家で詠歌(巻二)。  
 3・13 畠山持純家の十二月花鳥題で詠歌(巻二)。  
 3・20 和歌所で詠歌(巻二)。  
 4・1 山名照貴家で詠歌(巻二)。(注20)  
 4・3 畠山持純家の法楽百首歌を詠ず。飛鳥井雅世の合点を受く(巻二)。  
 4・4 実相院義運を北岩倉に訪れる。六日に和歌を送る(巻二)。  
 4・8 正広などと比叡山に登り、日吉社、志賀の浜松、志賀寺などで詠歌(巻二)。  
 この頃 北野松梅院の女に光源氏物語口伝に奥書を所望される(巻二)。  
 4・20 今熊野に草庵を結び、外出せず(巻二)。  
 5・15 畠山義忠家の月次会に出座(巻二)。  
 5・21 山名常照の病氣平癒祈禱百首に詠歌(巻二)。  
 6・9 播磨守祐順勧誘の崇徳法楽歌を詠ず(巻二)。  
 6・18 冷泉持和の訪問を受く(巻二)。  
 6・20 畠山義忠家の月次会に出座(巻二)。  
 6・25 山名持照勧誘の八幡法楽歌を詠ず(巻二)。  
 7・6 北野社の御手水結縁に参る(巻二)。  
 7・7 北野松梅院の女方より和歌を所望される(巻二)。  
 7・10 ●耕雲没(80余)。  
 7・14 性智院細川持元頓死し、十八日嵯峨で火葬するを見て詠歌(巻二)。  
 8・9 海印寺僧正広源坊の歌会に出座(巻二)。  
 8・12 海印寺坊の衆議判歌会に出座(巻二)。  
 8・15 山名照貴家の月次会に出座(巻二)。  
 8・28 草庵での歌会に出座(巻二)。  
 9・3 留守に畠山義忠の訪問を受く(巻二)。  
 9・13 実相院義運の所望で詠歌(巻二)。  
 9・15 山名持照家の月次会に出座(巻二)。  
 この頃 畠山持純の祖父の年忌で名号和歌を詠ず(巻二)。  
 9・22 畠山義忠家の月次会に出座(巻二)。將軍家の南都下向を見る(巻二)。  
 この頃 山名照貴、密かに詠草を持ち出す(巻二)。  
 9・29 二十二日の將軍家の南都下向を回想して詠歌(巻二)。  
 10・3 畠山持純家の歌会に出座。後に詠歌の僻案を後小松院に要望す(巻二)。  
 この頃 梅尾の紅葉を見物す。坊の歌会に出座。翌日、高雄おさきの坊で詠歌(巻二)。  
 11・6 草庵月次会に出座(巻二)。  
 11・16 遣迎院で探題歌を詠ず(巻二)。  
 11・22 畠山義忠家の月次会に出座(巻二)。  
 12・6 草庵月次会に出座(巻二)。  
 12・7 この夜より十三日まで、北野社に参籠し、百首を奉納す(巻一・巻二)。  
 12・14 山名照貴家の月次会に出座(巻二)。  
 12・18 海印寺へ行く(巻二)。  
 12・20 積雪を見て、海印寺僧正広源から和歌を送られる(巻二)。  
 この頃 歌会に出詠(巻二)。  
 遣迎院に参る(巻二)。  
 この年前後、心敬弟子となる(ひとりごと・所々返答)。(注21)  
 永享二年(一四三〇)、五十歳  
 正月試筆に詠歌(巻二)。正広、試筆に梅花の歌を詠じて見せる(巻二)。都を回想して詠歌(巻二)。

- 1・2 薄雪を見て詠歌(巻二)。
- 1・3 撰集類をみて、自己の無才を痛感(巻二)。月光を見て詠歌(巻二)。
- 1・5 妙行寺日宝上人の訪問を受ける(巻二)。
- 1・6 島山義忠家の歌会に出座(巻二)。
- 1・7 北野社に参詣して詠歌(巻二)。
- 1・8 山名持照家の歌会に出座(巻二)。
- 1・12 島山持純家の月次会に出座(巻二)。
- 1・14 多数の僧と安禅寺に参る(巻二)。
- 1・22 普勧寺の阿悉坊の寮で詠歌(巻二)。
- 2・7 下野守東益之家の歌会に出座(巻二)。
- 2・8 山名熙貴家の月次会に出座(巻二)。
- 2・9 島山義忠家の月次会に出座(巻二)。
- 2・11 島山持純とともに稻荷社に参拝す(巻二)。
- 2・12 元康・資盛・元綱らと詠歌(巻二)。
- 2・15 草庵月次会に出座(巻二)。夕方「春夕月」の歌題で詠歌(巻二)。
- 3・6 山名持照家の月次会に出座(巻二)。
- 3・17 北野松梅院の女方より八重桜を賜わる(巻二)。
- 3・26 仲則・阿悉坊らと海印寺に行き、二十七日に詠歌(巻二)。
- 3・30 海印寺で落花を見て詠歌(巻二)。頭風起り、広源方へ和歌を遣わす(巻二)。
- 4・1 海印寺の探題歌会に出座(巻二)。
- 4・18 北野松梅院の女方より硯と短冊を贈られる(巻二)。
- 5・2 阿悉坊の普勧寺奥の住居を見て詠歌(巻二)。
- 5・5 深草藤杜の祭見物。遣迎院で和歌を所望される(巻二)。
- 5・21 安禅寺の正安侍者の探題歌を詠ず(巻二)。
- 5・22 島山義忠家の月次会に出座(巻二)。
- 6・6 草庵月次会に出座。この時より正広に懐紙を提出させる(巻二)。
- 6・8 山名持照家の月次会に出座(巻二)。
- 6・10 島山持純家の月次会に出座(巻二)。
- 6・22 島山義忠家の月次会に出座(巻二)。
- 6・30 下野守東益之家で堯孝らと詠歌(巻二)。
- 7・6 草庵月次会に出座(巻二)。
- 7・7 島山義忠家で梶の葉七首を詠歌(巻二)。
- 7・10 島山持純家の月次会に出座(巻二)。
- 7・26 島山義忠家の月次会に出座(巻二)。
- 8・8 山名持照家の歌会に出座(巻二)。
- 8・10 島山持純家の月次会に出座(巻二)。
- 8・13 草庵月次会に出座(巻二)。
- 8・15 月蝕を見る。松梅院の女方より文あり(巻二)。
- 8・18 今川範政ゆかりの碩藏なる僧、駿河より訪れ、住吉法楽歌を興行す(巻二)。
- 9・2 島山持純家の月次会に出座(巻二)。
- 9・13 草庵月次会に出座(巻二)。
- 9・14 山名熙貴家の月次会に出座(巻二)。
- 9・15 島山持純家に冷泉持和らと詠歌(巻二)。在22
- 9・26 島山義忠家の月次会に出座(巻二)。
- 10・8 山名持照家の月次会に出座(巻二)。
- 10・14 毘沙門十輪院の歌会に出座(巻二)。
- 10・19 北野の御経結願の聴聞し、その夜松梅院に宿る(巻二)。
- 10・20 松梅院の女方より和歌を送られる。その後「法のむしろ」を女に遣わす(巻二・島根大学本・扶桑拾葉集所収本)。

- 10・26 広源と御禊の行幸を見物す(巻二)。  
 11・10 島山持純家の歌会で詠歌(巻二)。  
 11・28 草庵月次会に出座(巻二)。  
 閏11・8 山名熙貴家の月次会に出座(巻二)。  
 閏11・10 島山持純家の月次会に出座(巻二)。  
 閏11・13 草庵月次会に出座(巻二)。  
 閏11・26 島山義忠家の月次会に出座(巻二)。  
 12・3 海印寺広経僧正の茅屋を訪問す(巻二)。  
 12・5 海印寺の探題歌を詠す(巻二)。  
 12・14 草庵月次会に出座(巻二)。  
 この月頃 松梅院の女方より百首の点を所望される(巻二)。  
 永享三年(一四三一)、五十一歳  
 2・4 島山持純家で一日百首を詠歌(巻一)。  
 3・27 「徒然草」上冊を書写す(静嘉堂文庫本奥書)。  
 4・12 「徒然草」下冊を書写す(同前)。  
 永享四年(一四三二)、五十二歳  
 1・1 正月試筆に詠歌(巻二)。  
 1・2 草庵の竹に鶯の鳴くを聞きて詠歌(巻二)。  
 1・6 京へ出る(巻二)。  
 1・7 北野社に参詣す(巻二)。島山義忠、雛子の音頭を誂える(巻二)。  
 1・18 山名熙貴家で詠歌(巻二)。  
 1・26 海印寺広経僧正の閑室を訪れる(巻二)。  
 2・2 海印寺広経僧正の栗生の草庵を訪れて宿る(巻二)。  
 この頃 広経僧正の、母に孝行するを見て、八十歳で山城多賀にいる我が母を思う(巻二)。その夜、雪を見て詠歌(巻二)。  
 2・6 遣迎院の探題歌を詠す(巻二)。  
 2・8 松梅院の女方の病を見舞う(巻二)。  
 2・13 訪れた人々と詠歌(巻二)。  
 2・15 実増法師家の探題歌を詠す(巻二)。(注23)  
 2・19 藤原元康の訪問を受けて詠歌(巻二)。  
 2・22 山名熙貴家で詠歌(巻二)。  
 2・25 島山義忠家の月次会に出座(巻二)。(注24)  
 この頃 島山持純家の月次会に出座(巻二)。  
 2・29 花盛りの頃に雨の降るを見て詠歌(巻二)。  
 3・1 広経僧正を栗生の山庄に訪れる途中、俄雨の花を散らすさまを見て詠歌(巻二)。  
 3・4 三十首の探題歌を詠す(巻二)。  
 4・2 広経と圓明寺の花見に行く(巻二)。  
 4・8 山名熙貴家に宿っていた夜半、龍林和尚方より出火し、今熊野の草庵類火にあう。歌稿、抄物などすべて灰燼にきす(巻二・松下集)。  
 4・8 島山義忠家の火災見舞で詠歌(巻二)。  
 4・10 春日京極辺の旅宿から三條坊門西洞院辺の草庵に移る(巻二)。  
 4・18 土佐より太平隠岐入道素珍草庵に来る(巻二)。(注25)  
 4・25 亡父の三十三回忌追善供養を聖寿寺で行う(巻二)。(注26)  
 4・28 草庵月次会を始める(巻二)。  
 5・16 山名熙貴勸誘の日吉法楽歌を詠す(巻二)。  
 5・25 海印寺の月次会に出座(巻二)。  
 7・3 海印寺に人を遣わし、広経と和歌を贈答す(巻二)。  
 7・8 島山義忠と和歌を贈答す(巻二)。  
 7・19 藤原利永家で初めて妙椿に見参す(巻二)。(注27)。  
 7・20 草庵月次会に出座(巻二)。

8・13 海印寺に行く(巻二)。  
8・15 海印寺の十五夜百首歌を詠ず。ついで三十首を独吟す(巻二)。

「桐火桶」を書写す(某氏蔵写本奥附)。

9・2 光明峯寺の十輪院の月次会に出座(巻二)。  
9・29 海印寺の月次歌会に出座。判者は飛鳥井宋雅(巻二)。(注28)  
9・30 將軍義教の上洛あり。山名照貴より宇津の山の蔦を贈られる(巻二)。

10・4 宮道親世勸誘の清水寺法楽歌を詠ず(巻二)。(注29)  
10・5 東下野入道素明と和歌を贈答す(巻二)。

10・12 東素明家の探題歌を詠ず(巻二)。  
10・18 北野社の万部御経結願の見参にでかけて詠歌(巻二)。

10・19 山名照貴家の衆議判歌会に出座(巻二)。  
この頃 正広の代作をして宗砌にみぬかれる。(巻二・兼載雑談)。

11・4 海印寺で児の出家に際して詠歌(巻二)。  
中旬頃 成就院清賢と泊瀬寺に参籠す(巻二)。

11・15 藤井坊で長谷寺法楽歌を詠ず、また応永の昔日を懐旧す(巻二)。

この年頃 蟠川親世家の歌合で正広の和歌をほめる(松下集)。  
永享五年(一四三三)、五十三歳

1・1 雨中で正月試筆に詠歌(巻三)。  
1・2 風雨を見て詠歌(巻三)。

1・3 主上御元服に際し、風雨のおさまりしをみて詠歌(巻三・永享五年正徹詠草)。月光のさやかなるを見て詠歌(永享五年詠草)。

1・7 承祐法師のもとで詠歌(巻三・永享五年詠草)。  
1・8 草庵月次会に出座(巻三)。

1・10 畠山持純家の月次会に出座(巻三)。  
1・12 草庵で畠山義忠・同持純・山名照貴・東素明・同氏数などと詠歌(巻三)。

畠山義忠家の月次会に出座(巻三)。

1・26 草庵月次会に出座(巻三)。  
2・3 十輪院の月次会に出座(巻三)。  
2・14 斯波義有家の月次会に出座(巻三)。(注30)  
3・2 草庵月次会に出座(巻三)。

3・3 永明院の花見に行く(巻三)。  
3・8 海印寺広経僧正と観音寺の花を見る。ついで吉峯・岩蔵・蓮花寿院をめぐる。大原野で夕立にあう(巻三・永享五年詠草)。(注31)

栗生で詠歌(巻三)

3・11 畠山義有勸誘の北野社百首歌を詠ず(巻三)。  
この頃 山名照貴の硯屏に賛歌を記す(巻三・永享五年詠草)。

この頃 草庵月次会に出座(巻三)。  
4・3 畠山義有勸誘の八幡宮百首歌を詠ず(巻三)。

4・7 宮道親当、初めて草庵に來りて詠歌(巻三)。  
4・19 光明峯寺十輪院月次会に出座か(永享五年詠草)。

畠山持純家の衆議歌会に出座。勝負付を加える(巻三)。

草庵月次会に出座(巻三)。

5・3 時鳥を聞きに高雄神護寺に行く(巻三・永享五年詠草)。この夜、五覚院に宿りて探題歌を詠ず(巻三)。

5・27 五月雨の六月に降りそめたるを見て詠歌(永享五年詠草)。  
6・初 畠山持純より山桃を贈られる(巻三)。

6・16 宮道親当のもとに初めて行きて詠歌(巻三)。  
6・19 草庵月次会に出座(巻三)。

6・29	清水神護寺にて探題歌を詠ず(巻三)。	この頃	12・1	島山義忠家に行きて和歌を贈答す(巻三)。
7・7	藪里で詠歌(巻三)。	12・1	海印寺広経僧正の訃報に接し慨嘆す。他の人々の死も回想して詠歌(巻三)。	
7・12	草庵月次会に出座(巻三)。	12・12	草庵月次会に出座(巻三)。	
7・17	山門訴訟として世の中騒々しい頃、人々草庵に來りて詠歌(巻三)。	12・18	海印寺秀経僧正・弁雅法印へ、故広経の死を悼みて和歌を送る(巻三)。	
7・20	東素明家の歌会に出座(巻三)。	12・27	草庵に人々來りて詠歌(巻三)。	
閏7・2	山名熙貴の北小路猪熊邸で詠歌(巻三)。	年末	歳暮の感慨を詠歌(巻三)。	
8・12	草庵月次会に出座(巻三)。	永享六年(一四三四)、五十四歳		
この頃	草庵の転居に際して詠歌(巻三)。	1・1	正月試筆に詠歌(巻三)。	
8・26	島山義忠家の月次会で勅撰必定を思いて詠歌(巻三)。	1・3	月光を見て詠歌(巻三)。	
8・27	山名熙貴家の月次会に出座(巻三)。	1・5	草庵に人々來りて探題歌を詠ず(巻三)。	
9・13	海印寺で詠歌(巻三)。	1・6	島山義忠家で詠歌(巻三)。	
9・19	二條油小路で草庵月次会を催す(巻三)。	1・7	承祐法師の坊で詠歌(巻三)。	
9・26	細川持之家で詠歌(巻三)。	1・12	草庵月次会に出座(巻三)。	
10・10	宗叡法師の草庵造立に際し、山名持豊など参会あつて詠歌(巻三)。	1・22	山名熙貴家の月次会に出座(巻三)。	
10・11	赤松性具より文を送られる(巻三)。	1・28	東下野入道素明家で詠歌(巻三)。	
10・12	旅宿の月次会に出座(巻三)。	2・上旬	或る人に伴いて、内裏の諷聞のさまを拝観す(巻三)。	
この頃	島山義忠・同持純とともに法勝寺で詠歌(巻三)。	2・7	島山持純家で詠歌(巻三)。	
10・20	後小松院崩御に際し、東素明と和歌を贈答す(巻三・永享五年詠草)。	2・20	斯波義有家で詠歌(巻三)。	
この頃か	雪の夜、海印寺広経僧正のことなど思ひて詠歌(永享五年詠草)。	3・3	永明院に花見に行く(巻三)。	
10・25	再び春日西洞院の草庵に住みつく(巻三・永享五年詠草)。	3・14	山名熙貴家の月次会に出座(巻三)。	
この頃	宮道親当と和歌を贈答す(巻三)。	春	故広経僧正の供養に名号和歌を詠ず(巻六)。	
11・9	草庵に人々來りて詠歌(巻三)。	4・12	草庵月次会に出座、ついで名号和歌を詠ず(巻三)。	
11・12	草庵月次会に出座(巻三)。	4・20	覚空僧都の草庵で探題歌を詠ず(巻三)。	
		5・3	島山義有家で詠歌(巻三)。	
		5・4	この夜より詠草を編むことを決意す(安田躬菰編「類題草根	



集」所収古写本招月詠草奥書。(注32)  
 妙行寺日宝上人の坊で、島山義忠・赤松性具など参会して詠歌(卷三)。  
 山名持豊家の月次会に出座(卷三)。  
 人々と上賀茂に参詣し、秀久禰宜の家で法楽歌を詠ず(卷三)。  
 草庵月次会に出座(卷三)。  
 島山義有家で詠歌(卷三)。  
 草庵で人々と探題歌を詠ず(卷三)。  
 宗禰・藤原利永・宮道親当など草庵に來りて探題歌を詠ず(卷三)。  
 子息をなくした宮道親当のもとへ慰問の歌を送る(卷三)。  
 斯波義有家で詠歌(卷三)。  
 草庵月次会の歌合に出座(卷三)。  
 島山義忠家の月次会に出座(卷三)。  
 山門の神輿を見に行く途中、宮道親当家に引きとどめられて詠歌(卷三)。  
 斯波義有家で探題歌を詠ず(卷三)。  
 宮道親当勅進の法華經歌を詠ず(卷三)。  
 草庵の歌合に出座(卷三)。  
 藤原敏信家で詠歌(卷三)。  
 草庵月次会に出座(卷三)。  
 山名持豊家の月次会に出座(卷三)。  
 比叡山に登る陣中で山名照貴に百首題を所望される(卷三)。  
 草庵の歌合に出座(卷三)。  
 草庵月次会に出座(卷三)。  
 島山義忠から頭風の見舞を受ける(卷三)。

12・19 島山義忠家の月次会に出座(卷三)。  
 冬 東益之勅進の父十三回忌追善和歌を詠ず(卷六)。  
 12・ 「壬二集」を書写す(蓬左文庫本・東京大学国文研究室本奥書)。  
 年末 人々の忙しいさまを見て詠歌(卷三)。  
 永享七年(一四三五)、五十五歳  
 9・1 「和歌灌頂秘密抄」を書写す(尊経閣文庫本自筆奥書)。  
 永享八年(一四三六)、五十六歳  
 9・26 島山持純・同義有・松坊寛空僧都・正広らと水無瀬離宮を訪れ、後鳥羽院の歌を冠に置いて詠歌(卷三)。  
 永享九年(一四三七)、五十七歳  
 1・1 正月試筆に詠歌(永享九年正徹詠草)。  
 1・2 女松雛子を聞きて詠歌。月光を見て詠歌(永享九年詠草)。  
 1・3 竹に鶯の鳴くを聞きて詠歌(永享九年詠草)。  
 この頃 三日月を見て詠歌(永享九年詠草)。  
 1・6 新造の家で探題歌を詠ず(永享九年詠草)。  
 1・7 連歌奉行賢聖承祐のもとで詠歌(永享九年詠草)。  
 この頃 或る人のもとで詠歌(永享九年詠草)。  
 1・13 北野社に和歌を手向る(永享九年詠草)。  
 これ以後 招月庵に人々來りて詠歌(永享九年詠草)。  
 同 或る所で詠歌(永享九年詠草)。  
 同 下京なる所で詠歌(永享九年詠草)。  
 同 出雲国の人に扇に和歌を書きつけて贈る(永享九年詠草)。  
 同 印月軒の北野百首を詠ず(永享九年詠草)。  
 同 或る人勅進の崇徳院奉納和歌を詠ず(永享九年詠草)。  
 同 東山の人の所望で詠歌(永享九年詠草)。  
 同 陽明院の花を見て懐旧歌を詠ず(永享五年詠草)。

同 覚空上人と東山黒谷の花見に行く(永享九年詠草)。

同 若王子の花を見て詠歌(永享九年詠草)。

同 永観堂の花のもとで詠歌。その夜、草川の辺の禪院に宿る(永享九年詠草)。

同 花頂の花を見て詠歌(永享九年詠草)。

同 新造の白毫寺を見て詠歌(永享九年詠草)。

同 常在光寺で詠歌(永享九年詠草)。

同 通玄庵の花見に行く(永享九年詠草)。

同 仁和寺・桂宮院の花を見る(永享九年詠草)。

同 僧の酒飲み花折る姿を見て慨嘆す(永享九年詠草)。

同 御室寝殿を見て詠歌(永享九年詠草)。

同 或る所の探題歌を詠ず(永享九年詠草)。

同 春日西洞院の草庵を出る(永享九年詠草)。

同 老母の住む山里に宿りて、郭公の鳴くを聞く(永享九年詠草)。

4・1 此れ以後

同 仮宿で或る人と和歌を贈答す(永享九年詠草)。

同 仮宿で詠歌(永享九年詠草)。

5・5 藤原敏信勸進の父十三回忌追善和歌を詠ず(巻六・永享九年詠草)。

この頃 菩提心院で後堀河院の御影を見る。十住心院に歌詠み童と詠歌(永享九年詠草)。

5・6 端午に人のもとへ、菖蒲につけて和歌を送る(永享九年詠草)。

これ以後 室の屋島で詠歌(永享九年詠草)。

同 或る所の一品経講の後で詠歌(永享九年詠草)。

同 或る寺で詠歌(永享九年詠草)。

6・17 都を出発し、賀茂河・白河・松坂・四宮河原・走井・逢坂の

関を越えて弘濟寺に宿る。ここに旅宿をかまえる(永享九年詠草)。

6・22 これ以後 童の所望で光源氏の巻名を書き与える(永享九年詠草)。

同 園城寺の金堂に参詣す。三井・新羅大明神・みほの神の御前で詠歌(永享九年詠草)。

6・26 これ以後 或る人の室で探題歌を詠ず(永享九年詠草)。

同 舟で石山寺へ参詣。途中、連歌百韻などする。三十余年前、了俊と石山寺に來たこと回想す(巻三・永享九年詠草)。(註39)

6・30 志賀の夏祓を見て詠歌(永享九年詠草)。

7・1 立秋の心を詠歌(永享九年詠草)。

7・7 梶の七葉に七夕歌を記す(永享九年詠草)。

7・12 「永享九年正徹詠草」を記す(永享九年詠草)。

7・13 都へ帰るか(永享九年詠草)。(註34)

その後 五條坊門堀川の草庵に住む(松下集)。(註35)

永享十年(一四三八)、五十八歳

6・7 「祇園社法楽詠百首和歌」を詠ず(巻一)。

永享十一年(一四三九)、五十九歳

閏1・15 ●冷泉為之没(47)。

閏1・28 「伊勢物語」を書写す(天理図書館本奥書)。

6・7 ●「新統古今集」返納。

8・22 人々と玉津島へ参詣して法楽歌を詠ず。さらに、和歌の浦天神や吹上の浜で詠歌(巻三)。

永享十二年(一四四〇)、六十歳

3・17 住吉社に参籠を始める(巻一)。

3・18~21 「住吉法楽詠百首和歌」を詠ず(巻一)。

5・10余 和泉国佐野の藤原良繁家で詠歌(巻三)。同時に鳩の絵に賛歌を詠ず(巻三)。

この頃 泉州松尾寺の児に扇を遣わす(巻三)。

この頃 或人から扇に賛歌を所望される(巻三)。如意寺に参詣し、

西方院の岩に歌を記す(巻三)。

当初 二首の歌を沓冠に置きて詠歌(巻三)。

この頃か 美濃国稲葉山の社の法楽歌を詠ず。稲葉の石山や弥陀薬師を

詠ず(巻三)。

7・25 「源氏一滴集」を注釈す(国立国会図書館本奥書)。

11・27 「住吉法楽詠百首和歌」を詠ず(巻一)。

嘉吉元年(二四四一)、六十一歳

1・2 大病で臥すに人々来りて詠歌(松下集)。

6・ 土御門万里小路観心院とて三宝院の脇門跡辺に住む(松下集)。

嘉吉二年(二四四二)、六十二歳

4・3 ●東益之没(66)。

4・10 藤原盛隆勸進の父一回忌追善和歌を詠ず(巻六・書陵部本)。

4・10 杉生法印暹能を先達に、比叡山三塔巡礼に行く(巻三)。(注38)

4・13 東塔南谷相蔵坊・東谷長寿坊で詠歌(巻三)。

4・14 西塔六所の彼岸所で詠歌(巻三)。

4・15 横川兜卒谷善法坊で詠歌(巻三)。

4・16 帝釋寺・安楽寺など巡礼して詠歌(巻三)。

4・17 人々と日吉法楽歌を詠ず(巻三)。

4・ 〔伊勢物語〕(為秀自筆本)を書写す(天理図書館本奥書)。

当初 大館治部少輔の所望で八景屏風の賛歌を詠ず(巻三)。

当初 光源氏物語の所望ありし時詠歌(巻三)。

当初 畠山義有の死後、かの亭の萩を見て、義忠と和歌を贈答す

(尊経閣本草根集)。

嘉吉三年(二四四三)、六十三歳

2・10 「前撰政家歌合」に出座(続類従本など)。

7・17 「源氏物語」(桐壺卷)を重ねて書写す(徳本氏旧蔵本奥書)。

文安元年(二四四四)、六十四歳

2・30 一條兼良邸で「源氏物語」(乙女卷)の講義を聞く。持為・

堯孝・宗朝なども同座(康富記)。

秋 堯孝勸進の父堯阿三十三回忌追善歌を詠ず(巻六)。

文安二年(二四四五)、六十五歳

7・3 「家隆卿百番自歌合」を書写す(類従本・山口県立図書館本奥書)。

文安三年(二四四六)、六十六歳

1・9 東素欣のもとで詠歌(堯孝法印日記)。

1・20 畠山義忠家の月次会始めに出座(堯孝法印日記)。

1・23 一色教親家の月次会に出座(堯孝法印日記)。

4・21 畠山仙室家で詠歌(堯孝法印日記)。

6・7 「源氏物語」(夢浮橋卷)を書写す(徳本氏旧蔵本奥書)。

文安四年(二四四七)、六十七歳

1・1 正月試筆で八幡大菩薩御誕生を思いて詠歌。この日甲子なり

(巻三)。

1・2 小笠原備前入道浄元と和歌を贈答(巻三)。

1・6 畠山入道賢良(義忠)家で詠歌(巻三)。

1・17 三宝院大僧正教賢に和歌を遣わす(巻三)。

1・18 武田信賢家の月次会に出座(巻三)。

1・19 日野勝光家の月次会に出座(巻三)。

1・21 伊勢貞親家の月次会に出座(巻三)。

1・22 畠山賢良家の月次会に出座(巻三)。

1・23 一色教親家の月次会に出座(卷三)。  
 1・24 細川道賢家の月次会に出座(卷三)。  
 1・26 細川頼久家の月次会に出座(卷三)。  
 1・28 草庵月次会に出座(卷三)。  
 閏2・9 常光院堯孝の坊で詠歌(卷三)。  
 閏2・24 細川道賢家の月次会に出座(卷三)。  
 閏2・27 東福寺常喜世界の花のもとで詠歌(卷三)。  
 3・1 人々と石山寺の花見に行き、舟中で探題歌を詠ず(卷三)。  
 3・23 一色教親家の月次会に出座(卷三)。  
 3・25 島山賢良家の月次会に出座(卷三)。  
 3・30 日野勝光家の月次会に出座(卷三)。  
 この頃 一條兼良より法楽百首題を賜わりて詠歌(卷三)。  
 4・8 細川頼久家の月次会に出座(卷三)。  
 4・20 草庵月次会に出座(卷三)。  
 5・23 一色教親家の月次会に出座(卷三)。  
 この頃 仏地院僧都長算の硯を新調せしに詠歌(卷三)。  
 6・24 細川道賢家の月次会に出座(卷三)。  
 6・30 島山賢良家の月次会に出座(卷三)。  
 7・7 一色教親家の七夕歌を詠ず。同夕、島山賢良家の七十首歌も詠ず(卷三)。  
 7・20 草庵月次会に出座(卷三)。  
 8・15 島山賢良家の月次会に出座(卷三)。  
 8・24 細川道賢家の月次会に出座(卷三)。  
 9・9 小笠原浄元家の月次会始めに出座(卷三)。  
 10・6 島山賢良より重陽節句に勧誘されるも病にて行かず(卷三)。  
 10・9 小笠原浄元などと嵐山に紅葉見物(卷三)。  
 草庵に人々来りて詠歌(卷三)。

10・12 人々と高雄の落葉を見に行く(卷三)。  
 10・13 隠岐入道素珍家の月次会に出座(卷三)。  
 10・27 日野勝光家の月次会に出座(卷三)。  
 10・29 草庵月次会に出座(卷三)。  
 11・1 典薬頭盛長所望で障子絵に賛歌(卷三)。  
 11・3 細川頼久家で詠歌(卷三)。  
 文安五年(一四四八)、六十八歳  
 5・12以降 智蘊の死後、御経の包紙に和歌を詠ず(類題本草根集)。  
 10・13 島山賢良家の障子絵の十二月詩歌を詠ず(松下集・丑槐集・注38 続類従本など)。(注39)  
 宝徳元年(一四四九)、六十九歳  
 1・1 正月試筆に詠歌。藤原利永来りて和歌を贈答す(卷七)。  
 1・2 小笠原浄元と和歌を贈答す(卷七)。  
 1・6 島山賢良家で詠歌(卷七)。  
 1・10 杉原伊賀入道浄信と和歌を贈答す(卷七)。  
 1・16 或る所で詠歌(卷七)。  
 1・18 武田信賢家の月次会に出座(卷七)。  
 1・20 恩徳院の月次会に出座(卷七)。  
 1・24 細川道賢家の月次会に出座(卷七)。  
 1・25 三宝院准后了賢の御会始めに詠歌(卷七)。  
 1・26 藤原利永など草庵に来りて詠歌(卷七)。  
 2・4 東下総入道素忻家で詠歌(卷七)。  
 2・5 島山賢良家の月次会に出座(卷七)。  
 2・6 妙行寺月宝上人の坊で詠歌(卷七)。  
 2・7 三井寺仏地院僧都長算坊で詠歌(卷七)。  
 2・8 長算坊でまた詠歌(卷七)。  
 2・9 新羅大明神御的の時、長算坊で詠歌(卷七)。

長算坊の月次会に出座(巻七)。

小笠原浄元家の月次会に出座(巻七)。

忍哲法師の草庵に藤原利永沙汰せし月次会に出座(巻七)。

隠岐入道素珍家の月次会に出座(巻七)。

妙行寺で詠歌(巻七)。

明栄寺で人々と詠歌(巻七)。

細川道賢家の月次会に出座(巻七)。

東素忻家で詠歌(巻七)。

藤原利永勸誘の月次会に出座(巻七)。

一色教親家に会所作庭せし後に初めて参りて詠歌(巻七)。

細川道賢家の月次会に出座(巻七)。

渋川義鏡家で初めて詠歌(巻七)。

三宝院了賢方より和歌を賜わり、翌日返歌す。平元明の所望

で詠歌(巻七)。

島山賢良家の月次会に出座(巻七)。

東常縁、招月庵を訪れる(東野州聞書)。

隠岐入道素珍勸誘の月次会に出座(巻七)。

仏地院僧都長算坊の月次会に出座(巻七)。

平頼資勸誘で詠歌(巻七)。(注40)

武田信賢家の月次会に出座(巻七)。

或る人の所望で扇に賀歌を記す(巻七)。

島山賢良家で詠歌(巻七)。

住吉神社に参籠す(巻一・巻七)。

「住吉法楽詠百首和歌」を詠ず(巻一・巻七)。

堺より人々を誘い、ついで住吉法楽歌を奉納す(巻七)。

量阿の法楽歌の結縁に一首詠ず(巻七)。

住吉より堺に下り、南庄念仏寺の成就院僧都信海のもとで詠

歌(巻七)。

或る人の法楽歌を詠ず(巻七)。

或る人の法楽歌を詠ず(巻七)。

念仏寺成就院で詠歌(巻七)。

念仏寺の長海の坊で詠歌(巻七)。

或る人の諸神法楽歌を詠ず(巻七)。

或る人の家で詠歌(巻七)。

或る人の諸神法楽歌を詠ず(巻七)。

或る人の沙汰で成就院で詠歌(巻七)。

或る人の沙汰で玉蓮舎で詠歌(巻七)。

或る人の勸誘で詠歌(巻七)。

西坊長海の沙汰で詠歌(巻七)。

佃導場で詠歌(巻七)。

或る人の住吉玉津島法楽歌を詠ず(巻七)。

或る人の両神法楽歌を詠ず(巻七)。

小笠原浄元と和歌を贈答す(巻七)。

或る人の草庵の両神法楽歌を詠ず(巻七)。

堺の永福寺で福松丸張行の百首を詠ず(巻七)。

或る人と詠歌(巻七)。

澄心院で或る人與行せしに詠歌(巻七)。

永泉庵で詠歌(巻七)。

永泉庵で詠歌(巻七)。

永泉庵の人の勸めで詠歌(巻七)。

南寺西坊で藤原友規の追善歌を詠ず(巻七)。(注41)

見永庵の歌合に出座(巻七)。

念仏寺の賢順沙汰せしに詠歌(巻七)。

見永庵の歌合に独吟歌を提出す(巻七)。

5・24

5・20

5・19

この頃

5・11

5・9

5・8

5・6

5・5

5・4

4・29

4・27

4・26

4・23

4・22

4・20

4・16

4・14

4・13

4・11

4・10

4・8

4・7

4・6

4・5

4・3

3・盡

3・27

3・26

3・24

3・23

3・22

3・18

3・17

3・16

3・13

この頃

3・10

3・7

3・6

3・3

2・28

2・26

2・24

2・23

2・22

2・21

2・19

2・18

2・10

- 5・25 泉界より帰洛す。また、住吉に参りて詠歌(巻七)。  
 5・26 四天王寺で藤原宗好の勧めで詠歌(巻七)。  
 6・6 山名教豊家の月次会に出座(巻七)。  
 6・11 藤原利永沙汰せし月次会に出座(巻七)。  
 6・13 隠岐入道素珍沙汰せし月次会に出座(巻七)。  
 6・26 赤松教貞家に初めて参りて詠歌(巻七)。  
 6・27 鴨部之基の沙汰で詠歌(巻七)。  
 7・7 仏地院僧都長算坊にて詠歌(巻七)。一色教親家より題を賜わり、三井寺より和歌を遣わす(巻七)。  
 7・9 山名教之家の初めて月次会に出座(巻七)。  
 7・11 或る所の月次会に出座(巻七)。  
 7・18 武田信賢家の月次会に出座(巻七)。  
 7・19 畠山賢良家の詠歌(巻七)。  
 7・22 妙行寺の旅宿に東常縁の訪問を受ける(東野州聞書)。  
 この頃 御所の七夕歌から赤匠の歌などを東常縁に語る(東野州聞書)。  
 7・23 一色教親家の月次会に出座(巻七)。  
 7・25 山名教豊家の月次会に出座(巻七)。  
 7・26 堀川の旅宿に東常縁の訪問を受ける。古今集時代の和歌の解釈を語る(東野州聞書)。  
 7・29 隠岐入道素珍家の月次会に出座(巻七)。  
 8・4 赤松教貞家で詠歌(巻七)。  
 8・5 下部宗頼の沙汰で詠歌(巻七)。或る人東常縁に正徹の和歌を示す(東野州聞書)。  
 8・8 山名勝豊らと詠歌。ついで山名教豊家の月次会に出座(巻七)。  
 8・9 小笠原浄元家の月次会に出座(巻七)。東常縁の訪問を受け  
 8・10 藤原利永の沙汰せし月次会に出座。土岐持益家に永寿王、きたる十九日に關東還入するを知りて詠歌(巻七)。  
 8・15 一色教親家の歌会に出座(巻七)。  
 8・16 山名教之家の月次会に出座(巻七)。  
 8・18 永寿王の所望で天神御影に賛歌を記して遣わす(巻七)。  
 8・20 恩徳院の月次会に出座(巻七)。  
 8・22 畠山賢良家の詠歌(巻七)。  
 8・23 一色教親家の月次会に出座(巻七)。  
 8・29 仏地院僧都長算坊の月次会に出座(巻七)。  
 9・4 仏地院僧都長算坊の月次会に出座。この夜、長算坊の奥に草庵造立せし所で詠歌(巻七)。この時の詠歌、安東遠州が九月十七日に東常縁に話す(東野州聞書)。  
 9・6 山名教豊家の月次会に出座(巻七)。  
 9・9 醍醐寺西南院僧正願濟の坊で詠歌(巻七)。  
 9・17 山名教之家の月次会に出座(巻七)。  
 9・18 畠山阿州の供をして東常縁来る(東野州聞書)。  
 9・20 恩徳院の月次会に出座(巻七)。  
 9・21 東常縁に恩徳院御会の歌を示す(東野州聞書)。  
 9・23 一色教親家の月次会に出座(巻七)。  
 9・24 明栄寺で詠歌(巻七)。  
 9・26 武田信賢家の月次会に出座(巻七)。  
 9・27 小笠原浄元家の月次会に出座(巻七)。  
 9・28 草庵に人々来りて詠歌(巻七)。  
 10・5 畠山賢良家で詠歌(巻七)。  
 10・6 或る所で詠歌(巻七)。  
 10・6 山名教豊家の月次会に出座(巻七)。

- 10・8 小笠原浄元家の月次会に出座(巻七)。  
10・9 赤松教貞家の月次会に出座(巻七)。  
10・12 仁和寺藏勝庵で詠歌(巻七)。  
10・28 東常縁来る。飛鳥井入道の歌を示す(東野州聞書)。  
閏10・8 越前入道日成勸誘の住吉法楽歌を詠ず(巻七)。  
閏10・15 細川勝元の所望で鷹の百首題を新作にして遣わす(巻七)。  
閏10・20 恩徳院の月次会に出座(巻七)。  
閏10・21 或る所の月次会に出座(巻七)。  
閏10・23 一色教親家の月次会に出座(巻七)。  
閏10・29 仏地院僧都長算坊の月次会に出座(巻七)。  
11・7 細川頼久の勸めで詠歌(巻七)。  
11・9 正広方で詠歌(巻七)。  
11・10 畠山義澄の勸めで詠歌(巻七)。  
11・19 赤松教貞家の歌会に出座(巻七)。  
11・20 恩徳院の月次会に出座(巻七)。  
11・21 武田信賢家の伊勢法楽歌を詠ず(巻七)。  
11・23 小笠原浄元家で詠歌(巻七)。  
11・28 渋川義鏡家で詠歌(巻七)。  
11・29 畠山賢良家で北野法楽歌を詠ず(巻七)。  
12・2 山名教之家の月次会に出座(巻七)。  
12・5 仏地院僧都長算興行の大伴黒主社の法楽歌を詠ず(巻七)。  
12・6 長算坊の月次会に出座(巻七)。  
12・8 長算坊で詠歌(巻七)。  
12・10 一色教親家の月次会に出座(巻七)。  
12・11 或る所の月次会に出座(巻七)。  
12・14 明栄寺で小笠原浄元家の月次会に出座(巻七)。  
12・18 草庵で鎮守法楽歌を詠ず(巻七)。
- 12・20 恩徳院の月次会に出座(巻七)。  
12・21 草庵で諸神法楽歌を詠ず(巻七)。  
12・24 畠山賢良家で年忘の和歌を詠ず(巻七)。  
宝徳二年(一四五〇)、七十歳  
1・1 正月試筆に詠歌(巻八)。鴨部之基と和歌を贈答す(巻八)。  
1・2 正般の所望で扇に賛歌を記す。小笠原浄元と和歌を贈答す(巻八)。  
1・3 夕月の中を飛ぶ鷹を見て詠歌(巻八)。  
1・5 武田信賢家で詠歌(巻八)。  
1・6 畠山賢良家で詠歌(巻八)。  
1・13 隠岐入道素珍興行の月次会に出座(巻八)。  
1・14 病にて外出せず、杉原伊賀入道浄信と和歌を贈答す(巻八)。  
1・25 人の所望で扇に賛歌を記す(巻八)。  
1・27 渋川義鏡家より花桜一枝を賜わる。さらに、その枝を畠山賢良へ遣わす(巻八)。  
2・6 病をおして畠山賢良家の月次会に出座(巻八)。  
2・10 細川道賢家の月次会に出座(巻八)。  
2・14 渋川義鏡・石橋祐義など大光明寺で月次会せしに出座(巻八)。  
2・15 或る所の月次会に出座(巻八)。  
2・16 武田信賢家の月次会に出座(巻八)。  
2・17 山名教之家の月次会に出座(巻八)。  
2・18 赤松教貞家の歌会に出座(巻八)。  
2・20 妙行寺で畠山賢良などと詠歌(巻八)。  
2・25 細川道賢家の信濃梅を見て詠歌(巻八)。  
畠山賢良、東福寺栗棘庵に來りしに常喜庵の桜を見て探題歌を詠ず(巻八)。(注42)

- 2・26 畠山賢良家の月次会に出座(巻八)。注49
- 2・27 恩徳院正月分の月次会に出座(巻八)。
- 3・7 一色教親家で飛鳥井祐雅・同浄空などと詠歌(巻八)。
- 3・8 畠山賢良家での聖廟法楽百首を詠ず(巻八)。
- 3・9 大光明寺の月次会に出座(巻八)。
- 3・13 或る所の月次会に出座(巻八)。
- 3・15 妙行寺で詠歌(巻八)。
- 3・18 常楽寺で山名教之家の月次会に出座(巻八)。
- 3・22 仏地院僧都長算坊の月次会に出座(巻八)。
- 3・25 長算坊で探題歌を詠ず(巻八)。
- 3・30 恩徳院の月次会に出座(巻八)。
- 4・1 畠山賢良家で詠歌(巻八)。東常縁、招月庵を訪れて、二條・冷泉の沙汰を聞く(東野州聞書)。
- 4・4 赤松教貞家の歌会に出座(巻八)。
- 4・9 大光明寺の月次会に出座(巻八)。
- 4・16 常楽寺の月次会に出座(巻八)。
- 4・27 恩徳院の月次会に出座(巻八)。
- 5・12 宮道親元勅進の智蘊三回忌追善歌を詠ず(巻六)。
- 5・18 常楽寺の月次会に出座(巻八)。注44
- 5・19 大光明寺の月次会に出座(巻八)。
- 5・20 恩徳院の月次会に出座(巻八)。
- 5・21 細川氏久家で初めて詠歌(巻八)。注45
- 5・25 月輪宰相入道性照勅進に詠歌(巻八)。
- 5・26 小笠原浄元家の歌会に出座(巻八)。
- 5・30 仏地院僧都長算坊の歌会に出座(巻八)。
- 6・4 仏地院五智院僧都甚算坊で詠歌(巻八)。
- 6・6 小笠原浄元、長算坊で詠歌(巻八)。
- 6・8 赤松教貞家の歌会に出座(巻八)。
- 6・9 大光明寺の月次会に出座(巻八)。
- 6・13 或る所の月次会に出座(巻八)。
- 6・16 常楽寺の月次会に出座(巻八)。
- 6・17 細川氏久家で月次会始めに出座(巻八)。
- 6・18 「俊成九十賀記」を書写す(東洋大学図書館本ほか)。東常縁の訪問を受ける(東野州聞書)。
- 6・20 恩徳院の月次会に出座(巻八)。
- 6・23 或る所で詠歌(巻八)。
- 6・24 十住心院の心恵方で探題歌を詠ず(巻八)。
- 6・26 或る人の所望で歌題を遣わす(巻八)。
- 6・27 隆宗法印坊で詠歌(巻八)。
- この頃か 東氏数の腫物を見舞う。翌日、東常縁が御礼に来る(東野州聞書)。
- 7・4 細川勝元家で詠歌(巻八)。
- 7・7 細川勝元家で七夕歌を詠ず。同夕、畠山賢良家でも詠歌(巻八)。
- 7・9 大光明寺の月次会に出座(巻八)。
- 7・13 或る所の月次会に出座(巻八)。
- 7・18 坪和之為勅進の聖廟法楽歌に出詠(巻八)。
- 7・20 恩徳院の月次会に出座(巻八)。
- 7・22 細川氏久家の月次会に出座(巻八)。
- 7・23 一色教親家の月次会に出座(巻八)。
- 7・24 畠山賢良と賀茂社で奉納歌を詠ず(巻八)。
- 8・2 暁より持病起りて、いづれの歌会にも出でず(巻八)。
- 8頃か 鹿苑院主春林和尚と和歌を贈答す(巻三・東野州聞書)。注46
- 9・13 赤松教貞の所望で歌題を遣わす(巻八)。



この頃 越前入道宗圓の死に際して歌を遣わす(巻八)。

9・17 人々、持病見舞に來りて詠歌(巻八)。

9・18 畠山賢良と仁和寺藏勝房で詠歌(巻八)。

9・20 持病少しおさまり、恩徳院の月次会に出座(巻八)。

9・22 大光明寺の月次会に出座(巻八)。

9・23 24 「古寺紅葉」の歌題で詠歌(巻八)。

9・25 妙蓮寺で詠歌(巻八)。

9・27 赤松教貞から送られた歌題で詠歌(巻八・東野州聞書)。

9・28 畠山賢良家で詠歌(巻八)。

9・30 細川頼久家で詠歌(巻八)。

10・9 小笠原浄元家で詠歌(巻八)。

10・15 大光明寺の月次会に出座(巻八)。

10・17 細川氏久家の九月分の月次会に出座。同夜、人々草庵に來りて詠歌(巻八)。

10・18 一色教親家で詠歌(巻八)。

10・20 或る所の月次会に出座(巻八)。

10・22 畠山賢良家の長老達の会合で「官閣早梅」の歌題で詠歌(巻八)。

10・25 恩徳院の月次会に出座(巻八)。

10・26 三井寺で詠歌(巻八)。

10頃 心敬批判を東常縁らに語る(東野州聞書)。

11・7 東常縁の訪問を受ける。細川勝元、使者をもって和歌の師匠を依頼す(巻八・東野州聞書)。

11・8 細川勝元家に礼に行く(巻八)。

11・10 斯波持種家で初めて詠歌(巻八)。(注47)

11・11 武田信賢家で詠歌(巻八)。

11・12 細川勝元家の歌会に出座(巻八)。

11・14 或る所の月次会に出座(巻八)。

11・16 大光明寺の月次会に出座(巻八)。

11・17 細川氏久家の月次会に出座(巻八)。

11・18 赤松教貞家の歌会に出座(巻八)。

11・20 畠山賢良家で詠歌(巻八)。

11・21 恩徳院の月次会で詠歌(巻八)。

11・22 渋川義鏡家で詠歌(巻八)。

11・24 細川道賢家の再興の月次会に出座(巻八)。

11・25 常楽寺の再興の月次会に出座(巻八)。

11・27 人々草庵に來りて細川勝元との師弟の契りを佳して詠歌(巻八)。

12・2 東常縁、堯孝の弟子になる(東野州聞書)。

12・4 細川勝元家で詠歌(巻八)。

12・5 渋川義鏡家で詠歌(巻八)。

12・6 細川氏久家の月次会に出座(巻八)。

12・8 畠山賢良家の月次会に出座(巻八)。

12・9 大光明寺の月次会に出座(巻八)。「伊勢物語」(定家自筆本)を書写す(東大図書館本奥書)。

12・10 畠山賢良家の再興月次会に出座。飛鳥井祐雅も同座(巻八)。

12・12 一色教親家の再興の月次会に出座(巻七)。

12・13 常楽寺で詠歌(巻八)。

12・14 小笠原浄元家で詠歌(巻八)。

12・18 畠山賢良家で年忘会で詠歌(巻八)。

12・20 仏地院僧都長算坊の歌会に出座(巻八)。

12・22 仏地院或坊で新羅法楽歌を詠ず(巻八)。

12・23 仏地院南院玉泉坊で詠歌(巻八)。

12・30 將軍家に參って心懐を詠歌(巻八)。

- 注
- (1) 正徹の生誕地に関係しては、藤原隆景氏『新撰正徹千首』など、一連の論考に詳しい。
- (2) 「幼かりし頃、七月に星を手向くるとて一首哥を読み、木の葉に書き付け侍りしが、哥の初め也」(正徹物語)から、この頃と推定した。
- (3) 「九月九日予か十二歳の年なりしやみぬ(本ノマ、)伏見院の御所いまたつり殿萱御所などのこりたりし……」(巻十)による。
- (4) この年時の考証は、拙稿「正徹と了俊」(国文学攷 54号)を参照。
- (5) 「その後、ならの門跡に奉入つかまつり侍しころ」(正徹物語)により推定。
- (6) 「実相院僧正入峯させ給ふとて奈良の尊勝院へ立ち寄りて、一夜泊りてつとめて出でさせ給ひければ……」(正徹物語)より推定。
- (7) 永享四年の三十三回忌供養より逆算。
- (8) 永享四年の火災の条で「愚老廿歳のとしよりよみおきし歌二萬六七千首三十餘帖に書おきしも……」(巻二)による。
- (9) この年時の考証は、拙稿「正徹と了俊」(国文学攷 54号)を参照。
- (10) この年時の考証は拙稿「正徹の伝記をめぐる」二、三の問題」(国文学攷 34号)を参照。
- (11) 注(9)の拙稿で考証した。
- (12) 注(9)の拙稿で考証した。
- (13) 「いにしへ廿六歳にて東国に下向せしことを思ひ出てよめる」(巻二)より推定。但し、この「廿六歳」には疑問をもつむきもある(井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町前期』)。
- (14) 松原三夫氏「招月庵正徹傳攷抄」(水滸 昭10・9)の考証による。
- (15) 拙稿「正徹・堯孝の和歌を含む『頓證寺法楽和歌』の二つの新資料について」(国文学 昭43・2)に紹介。
- (16) 注(15)に同じ。
- (17) 拙稿「正徹・堯孝の和歌を含む『詠法華経和歌』の新資料について」(国文学 昭44・5)に紹介。
- (18) この百首については拙稿「正徹百首」の諸本と成立について」(文学・語学46号)に論じた。「二月」か「二月」問題もあるが、一応「二月」とした。
- (19) 巻一と巻三との記事は、同一時のことと推定。
- (20) 丹鶴本「山中名中務大輔照貴」とあるが「照貴」に訂正。他の山名氏の「照」も「照」とした。
- (21) 「三十年の庭訓」(所々返答)より推定。
- (22) 丹鶴本・書本「十九日」だが、尊本・内本の「十五日」による。
- (23) 丹鶴本は「寶増」、尊・書・内の各本は「寶増」。後者による。
- (24) 丹鶴・書・尊の各本「廿二日」、内本「廿三日」。一応前者による。
- (25) 丹鶴本など「素球」とあるも、他本の「素珍」に統一。
- (26) 丹鶴本「卅年」とあるも、内・尊の各本「卅三年」。後者による。
- (27) 丹鶴本「十日」、内本「十九日」。後者による。丹鶴本「妙慎」、書・内・尊の各本「妙椿」。後者による。
- (28) 丹鶴本「九日」、書・内・尊の各本「廿九日」。後者による。
- (29) 丹鶴本「十四日」、書・内・尊の各本「十月四日」。後者による。丹鶴本「親世」、書・内・尊の各本「親世」。後者による。
- (30) 丹鶴本「茂有」、一本「義有」。後者による。
- (31) 丹鶴本「十日」、永享五年詠草「九日」。後者による。
- (32) 拙稿「安田躬弦編『類題草根和歌集』の成立」(文学・語学39号)に紹介。このこと、注(10)の拙稿で紹介。
- (33) 「十三日、八宮ごにかへりぬへきを」(永享九年詠草)より推定。
- (34) 「粟津の西かさきといふ所にも年一とせはかり住給て其より都へのほり給て五條坊門堀川に小庵ありて住給」(松下集)より推定。
- (36) 丹鶴本「還能」、書・内・尊の各本「還能」。後者による。
- (37) 「此ころ母の服にて参社」(巻三)から推定。
- (38) 「智蘊身まかりて後、経を送し時つみ紙に」(陽明文庫などの類題系草根集)より推定。
- (39) 拙稿「畠山匠作享詩歌」の諸本と成立について」(和歌文学研究 23号)に詳論した。

- (40) 丹鶴本「頼賢」、書・内・島の各本「頼資」。後者による。
- (41) 丹鶴本「友親」、書・内・島の各本「友規」。後者による。
- (42) 丹鶴・書の各本「廿五日」、内・尊の各本「廿四日」。一応前者による。
- (43) 丹鶴本「廿二日」、書・内・尊の各本「廿六日」。後者による。
- (44) 丹鶴本「十六日」、書・内・尊の各本「十八日」。一応後者による。
- (45) 丹鶴本「久家」、書・内・尊の各本「氏久」。後者による。以下同じ。
- (46) 卷三には文安四年十月の条に「其頃」としてこの記事のせる。ここは一応「東野州聞書」の「宝徳二年八月比か」による。
- (47) 丹鶴本「十一日」、書・尊の各本「十日」。一応、後者による。

(昭和四十七年四月十五日受理)